

# 国語

時間  
60分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2、この冊子は27ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明で読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。

聖光学院中学校

1

(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

一、次の①～⑤の文の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① 地方経済の活性化を目指して、新技術の開発事業にシュツシする。

② 上級生たちはイベント運営のトウジ者として、悩みながらも臨機応変な動きを見せていた。

③ 生徒会長に選ばれた僕は、全校生徒に就任にあたってのシヨカンを述べた。

④ 彼女の豊富なアイディアのゲンセンは、日々の読書の中にある。

⑤ 些さい細なことでぎくしゃくしてしまった友達とのわだかまりをセイサンできて嬉しい。

二、次の①～⑤の文の [ ] にあてはまる言葉を、例にならって、それぞれひらがなで答えなさい。  
ただし、 [ ] には「」内の文字数のひらがなが入ります。

例

お弁当箱を次の日の朝まで放置して、母にお灸を [ ] られた。 [二] ↓〈答〉すえ

① 今年こそは優勝して、去年の雪辱を [ ] たい。 [三]

② 低予算で作った映画が評判となり、優れた映画監督として脚光を [ ] た。 [二]

③ 生徒会長選挙での彼の公約は、生徒たちの間で物議を [ ] た。 [三]

④ 彼は、上司の話に絶妙なタイミングで合いの手を [ ] のが上手だ。 [三]

⑤ 留学のチャンスをみすみす逃してしまい、ほぞを [ ] 思いだ。 [二]

三、次の文章は、森沢明夫『本が紡いだ五つの奇跡』の一節である。涼元（俺）は安定した生活のために小説家をやめて他の仕事に就こうとしている。問題文は、涼元が東西文芸社の編集者である津山に呼び出されて小説の執筆依頼の打ち合わせに出向いた場面から始まっている。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

喫茶店のテーブル越しにいる女性は、やたらとおどおどしていた。

東西文芸社の編集者、津山奈緒だ。

送られてきたメールの文章からは、わりと落ち着いた印象を受けたのだが、いざ会ってみると、これがいけず若くて驚いた。聞けば、まだ二六歳だという。

津山は、俺の顔を見た瞬間から挙動不審になり、そのまま過度に緊張し続けているようだった。ふつうに会話をしている、ひたすら困ったように眉尻を下げているし、ふたこと目には「すみません」と言っへこへこ頭を下げる。もしかすると、前担当者からの引き継ぎの際に、「あの作家は気が短から気をつけなよ」なんて余計なA入れ知恵をされたのかも知れない。

とにかく、初対面の津山奈緒という編集者は、小心者で、ちよつと不器用で、自分に自信が持てずにいるけれど、一方では、まじめで、優しく、素直な人――。

そんな印象を抱かせる人物だった。

はつきり言っへ、こういうタイプの人間は嫌いじゃない。仕事ができるかどうかはともかく、人としての信頼に足ると思うし、どこか俺と似通った「駄目なところ」が見え隠れして、ついシンパシーを抱いてしまいそうにもなる。

うっかり会話を弾ませてしまったら、「じゃあ、書きます」などと首を縦に振ってしまいそうな危険性があるから、俺はやや遠回しにこう言っへた。

①俺が書いても売れないと思うよ。津山さんの実績を落とすだけじゃないかな  
すると、津山は小刻みに首を振って否定した。

「いえ、ですから、そんな――」

「だって、キミ、東山さんより敏腕なの？」

東山というのは前任の担当者で、東西文芸社ぎつてのヒットメーカーと評されていた切れ者だが、なぜか俺に書かせた作品はちつとも売れず、その後、険悪な関係になったのだった。俺は、その東山という名前を使っへて、経験の浅い津山に軽く意地悪をすてやっへたのだ。

しかし、津山は、俺の台詞に気を悪くするでもなく、むしろ、すんなり受け入れて、軽く前のめりになつてきた。

「東山さんほど経験はないですし、敏腕でもないと思います。でも、<sup>②</sup>先生の作品が持つ物語のチカラについては、わたしの方がよく理解している自信があります」

切実な目。本当にまじめな人なんだな、と思う。

「へえ。そうなんだ」

「はい……」

どぎまぎしている津山に、俺はとどめを刺してやることにした。

「じゃあ、俺の生活を保障してくれる？」

「え——」

「絶対に売れる本を書かせて、絶対にヒットさせてくれる？」

「それは……」

「無理でしょ？ 悪いけど、俺にも生活があるからさ。いまね、よくあるエディタースクールみたいな専門学校で、文章の書き方を教える講師のバイトをやつてんの。そしたら、その理事長さんに評価されてさ、正社員にならないかって誘われてるわけ」

「え、じゃあ、小説家としてのお仕事は……」

いつそう眉尻を下げて、やたらと悲しげな顔をした津山を見ていたら——、なぜか俺の口は嘘を吐いていた。

「副業くらいがいいかなって。もしくは、いま書いてる連載を最後に、じわじわと畳んでいくのもありかなって思ってるんだよね」

「そんな……、先生の才能が、もったいないです」

俺とは違い、津山は嘘をついてはいなかった。この X な目を見れば、俺にだってそれくらいは分かる。ただし、編集者としての彼女の目が節穴なのかどうかは、俺には分からないけれど。

「俺の才能か」

ひとりごとみたいに言った俺は、喉の奥で、くくく、と笑ってしまった。それは、あきらかな Y だった。

「まあ、デビューした当時は、俺も自分には才能があるんじゃないかって勘違いしてたけどさ。でも、よく考えてみなよ。筆一本じゃ生活が成り立たない小説家に、才能なんてあると思う？」

「わたしは、思います」

津山は、そう言ってこくりと頷いた。

「……………」

気弱で、おどおどしているくせに、その切実でまっすぐな視線は、どういうわけか俺の胸の奥にある何かに触れて、ざわつかせる。

いま、俺は、動揺しているのか？

自問した俺は、テーブルの上にあったロイヤルミルクティーを飲んで、自分を取り戻そうとした。そして、なかば強がるように「津山さん、おもしろいね」などと、社会人としてはあり得ないほど失礼な台詞を口にしてしまうのだった。

このままでは、津山に嫌われる前に、自分で自分のことをますます嫌いになりそうだ。

そんなことを考えつつも、俺はひたすら自虐とネガティブな言葉を、真摯な津山にぶつけ続けた。

しかし、津山はあきらめなかった。それどころか、「これだけでも聞いて下さい。お願いします」と、テーブルでおでこが付きそうなほど深く頭を下げたのだ。

いったい何なんだ、この人は。見ていて痛々しいし、泥臭すぎる。あの、いつもスマートで **B** 泰然 **たいぜん** 自若 **じじやく** としていた東山とは真逆の人間じゃないか――。

俺は少し困ったふりをしつつ、津山がゆっくりと顔を上げるのを待った。そして、おどおどしながら話す声に耳を傾けた。

「ええと、わたしとしては、これまでのようなミステリーではなくて、先生の代表作とも言える『空色の闇』のような、人間愛を描いた小説を、もう一度、書いて頂きたいんです」

津山は訴えるように俺を見た。

たまらず俺は視線をそらし、窓の外に目を向けた。

冷たい風に凍えた街は、やつぱりどこか灰色がかって見えた。ビルの上には、いかにも冬らしい透き通った青空が広がっているのに。

「先生のいちばんの才能はそこにあると確信しているんです」

**C** 駄目押し **だめおし** でもするように津山が言った。

俺は、空を見たまま、ゆっくりと呼吸をした。

『空色の闇』は――、まだ素人だった俺の作品を嬉しそうに読んでは、「マサミには文才があるなあ」と褒めてくれた父に捧げた作品だった。その原稿を書きはじめたのは、父の身体に癌が見つかり、余命

を宣告された日の夜のこと、<sup>しめき</sup>「べ切り」は、父が元気でいるあいだ、と俺自身が設定した。

当時、勤め人だった俺は、空き時間のすべてを執筆<sup>しっぴつ</sup>にあて、必死に筆を走らせた。何としても父の好きな「小説」というカタチで、俺の想い<sup>おも</sup>を届けたかったのだ。

だが、結果から言えば、その願いは叶<sup>かな</sup>わなかった。

まだ半分も書けていない段階で、父の容体は急変し、あっさり逝<sup>い</sup>ってしまったのだ。

父を亡<sup>な</sup>くしたあと、俺はその原稿から距離<sup>きょり</sup>を置いていた。しかし、四十九日<sup>しじゅうくにち</sup>の法要のとき、父と仲の良かった叔母<sup>おば</sup>が、喪服<sup>もふく</sup>の俺をまじまじと見てこう言ったのだ。

マサミくん、佇<sup>たたず</sup>まいがお父さんに似てきたねえ――。

それを聞いたとき、俺は、当たり前すぎることに想いを馳<sup>は</sup>せた。

そうだ、俺の半分は父なのだ。ということは、父の遺伝子は、まだ生き残っている。俺のなかに……。そう思ったら、俺は自分の身体がずいぶんと大切なものに思えてきて、そして、<sup>③</sup>とても自然な感じでスイッチが入ったのだった。

やっぱり、書こう。あの小説の続きを。書き上げて、空に手向<sup>たむ</sup>ければいいじゃないか――。

それから俺は、あまり急がずに『空色の闇』の原稿を綴<sup>つづ</sup>っていった。そして、二ヵ月後、完成したその作品をとある文芸誌の賞レースにのせてみたところ、新人賞<sup>かんとく</sup>を獲得し、晴れて小説家としてデビューを果たしたのだった。

俺は、ビルの上の空から視線を剥<sup>は</sup>がし、あらためて若い編集者を見た。

この人は、俺にアレを書けと言うのか――。

相変わらず津山は、どこか祈<sup>いの</sup>るような目で俺を見ていた。

書けと言われて、はいそうですか、と書けるような作品じゃないんだけどな……。

俺は、胸の内側がむずむずしはじめていることに気づいた。変に苛<sup>いら</sup>ついているのだ。津山に、というより、アレを書く自信を持ってない自分自身にたいして。

「それってさ、ようするに、俺にはミステリーを書く才能がないってこと？」

俺は、自分でも思いがけないほど悪意のある言葉を、善意の人にぶつけていた。

「えっ？ いいえ、まさか、そういう意味では――」

両手を前に出し、慌<sup>あわ</sup>てて首を振る津山。

「じゃあ、俺がミステリーを書いても売れないってこと？」

「いえ、ですから、そういうことではなくて、わたしは――」

「わたしは、なに？」

「え——」

と言葉を詰まらせた津山を見ていたら、俺は、もう、たまらない気持ちになってしまい、腕時計に視線を落とした。

「あ、もう時間じゃん。これから例のバイトだから」

嘘だった。

本当は、まだ時間にはたっぷりの余裕があった。

「え……」

「じゃあ、そういうことで」

最後の言葉は、かすれてしまった。

俺は、ぐったりとした身体に力を込めて立ち上がると、そのままレジの前をすり抜けて外に出た——というより、店の外へと逃げ出した。

歩き出してすぐに、俺は首をすくめた。街を吹き抜ける風は、さっきよりも冷たく、ざらついていて、灰色だった。

俺は、まだ津山が座っているであろう喫茶店の窓の外を、背中を丸めて通り過ぎた。なんとなく背中に津山の視線を感じていたけれど、振り返らずに歩を進めた。

人混みにまぎれ、駅前の横断歩道を渡ったところで、ようやく俺は津山の視界から消え去ることができた。

④ ふう、と嘆息して、歩道の脇で足を止めた。そして、コートのポケットからスマートフォンを抜き

出し、アルバイト先の事務室に電話をかけた。

すぐに、顔見知りのおばちゃんが電話に出てくれた。

「すみません、アルバイトの涼元ですけど」

俺はそう言って、軽く咳き込んでみせた。

「あら、お疲れさま。どうしたの？」

「じつは、今朝から体調がすぐれなくて。今日の講義、お休みさせてもらえたらと……。生徒たちうつしてもアレなんです」

「あらら、たいへん。涼元先生が風邪を引くなんて珍しいわね」

心配してくれたおばちゃんが、あれこれしゃべっているあいだ、俺は別のことを考えていた。

この近くに、昼間から飲める酒場はなかったかな――。

今日は浴びるほど飲みたい。

飲むことで自分を罰し、痛めつけ、そして、何かから逃れたかった。

\*\*\*

枕元でスマートフォンが騒ぎ出した。

俺は目を閉じたまま、音のする方へと手を伸ばし、端末をつかんだ。

薄目を開けて画面を確認する。

アドレス帳に登録していない人からの電話だ。

時刻は、午後三時を過ぎている。

まったく、誰だよ……。

カーテンの隙間から昼間の光が漏れているな、と思ったとき、俺は自分の身体の異変を感じ取った。

顔をしかめたくなるほどの頭痛。毛細血管までびっしりと泥が詰まったような倦怠感。食道を圧迫する胸焼け。胃の奥からこみ上げてくる吐き気。

ひどい二日酔いだった。

しかし、無慈悲なスマートフォンは、ひたすら騒ぎ続けていた。

うるせえなあ……。

「もしもし？」

俺は、布団に横たわったまま電話に出た。

「あ、お世話になっております。東西文芸社の津山です」

その声を聞いたとたんに、昨日の自己嫌悪が俺の内側で弾けた。

「なんだ。誰かと思ったら」

「はい。何度もすみません」

電話の向こうでへこへこと頭を下げている様子が思い浮かぶ。

「挨拶はいいよ。で、俺に、まだ何か用があるわけ？」

そう言うてすぐ、俺は頭痛と吐き気で「はあ……」と声に出してしまった。おそらく津山は、俺が面倒臭さをアピールするためについたため息だと受け取っただろう。

しかし、今日の津山は、昨日とは少し違った。声にくらか張りがあるのだ。そして、その張りのある声で、思いがけない告白をはじめたのだった。

「じつは、わたくしごとなんですけど、高校三年生のときに、ちょっと自殺を考えるほど苦しい日々を送っていたんです。でも、そのとき、先生のデビュー作の『空色の闇』と出会えたことで、未来に小さな光が見えた気がして、救われたんです」

また、あの小説の話かよ――。

俺は布団に入ったまま目を閉じた。そして、黙<sup>だま</sup>って津山の言葉に耳を傾けていた。

「ええと、ですから、わたしは、先生と『空色の闇』に心から感謝をしています。しかも、いま、こうして先生の担当編集者になれたことは、わたしの人生のなかで、ある種の『奇跡<sup>きせき</sup>』なんじゃないかとさえ思っています」

奇跡<sup>きせき</sup>って……。

大袈裟<sup>おおげさ</sup>なことを言い出した津山は、さらにしゃべり続けた。自分はまだヒットを出したことがないとか、東山と比べれば非力で無能だとか、さらには、近々、営業部に異動させられるかも知れないなどと、気弱なことを口走りはじめたのだった。

会話が嘘<sup>うそ</sup>が無いのはいいことだが、何でもかんでも正直に話せばいいというものでもない。そもそも、そんな状況<sup>じやうきやう</sup>の編集者に付き合わされる作家の身にもなってみろ、と言いたい。

だから俺は、あえて投げやりな感じで言った。

「あのさ、津山さんが俺の作品で救われたというのが本当だとしたら、そのことに関しては、俺は素直に嬉しいと思うよ」

「あ……、はい。それはもちろん本当です」

「じゃあ、それでいいじゃん」

「……と、言いますと？」

「キミが救われたんだから、もう、それで充分<sup>じゅうぶん</sup>だってこと」  
すると津山は、ふいに強い口調で返してきた。

「駄目なんです、それじゃ」

「……………」

俺は、閉じていた目を開けた。

「あ、す、すみません。あの、でも、駄目なんです」

「駄目って、何が？」

「ええと、わたしが救われただけでは、わたしが駄目なんです」

「ちょっと、言ってる意味が分からないけど」

一瞬、津山は黙った。その沈黙の背後に、小さな女の子がはしゃいでいるような声が聞こえた。津山はいま公園にでもいるのだろうか。

「ええと——」津山が、ふたたびしゃべり出した。「かつて、先生の小説に救われたわたしには、いま、先生の小説で助けていたい人がいるんです」

助けていたい人？ 俺の小説で？

「はあ？ まさか、たった一人の、その人のために小説を書けっていうの？」

「はい。たった一人のわたしを救えた先生の筆で、また別の一人を救えたら、と思ひまして。そういうのも文芸の素敵な力なんじゃないかと——」

それが、津山の言う『空色の闇』みたいな作品、ということなのだろう。

「おいおい、ちょっと待ってよ」仰向けの俺は、古びてシミの浮いた天井に向かってしゃべりはじめた。「小説家はさ、一人のためになんて書けないんだよ。たくさんの人が読んでくれないと生活が成り立たないんだって、昨日、言ったよね？ っていうか、キミは編集者なんだから、それくらい知ってるでしょ？」

もちろん、天井は返事をしてくれない。

でも、津山は熱っぽい言葉を返してきた。

「それは、もちろん分かっています。でも、一人を救える力を秘めた本は、たくさんの人を救えることだっただけだと思うんです。実際に『空色の闇』は映画化もされましたし、ベストセラーになったじゃないですか。そうやって過去の成功事例に倣うことは、わたしとしては、少しも悪いことじゃないと思います」

「津山さんさあ」

「はい」

「キミは結局、誰を救いたいわけ？ まさか、それって仕事が上手くないってない自分のことじゃないよね？」

「え、それは——」

津山は言葉を詰まらせた。

俺が黙っていると、恐るおそる、といった口調で続けた。

「もしかしたら、わたしも救われたいと思っっているかも知れません。でも、それだけではなくて……」  
つくづく正直すぎる人だった。俺はやっぱり、この人のことが嫌いじゃない。そう思いながらも――、いや、むしろ、そう思ったからこそ、俺はあえて呆れたような口調で言ったのだ。

「なんだ、やっぱりそうなのか」

「えっ、違います。ちよつと待って下さい――」

それから津山は、俺に書いて欲しいという小説の内容について、熱っぽく早口でまくしたてた。  
いわく、明日が見えなくて不安に押しつぶされそうな人や、未来を恐れて動き出せずにいる人に、そつと寄り添い、背中をさすりながら、大切な「いま」の美しさを感じさせてあげられるような、そんな作品をイメージしているのだそうだ。たとえば主人公はこんな感じで、舞台はこんなところで……と、具体的な内容にまで踏み込みながら、津山は決して器用とはいえない言葉を使って、俺の想像力を刺激しようとしていた。

⑤ うん、なるほどね……。

俺は、津山に聞こえないよう、そつとため息をついた。

この人は、東山よりも非力で無能だなどと卑下していたけれど、少なくとも『空色の闇』については、彼よりもずっと深いところまで作品を理解していた。

二日酔いで気分は最悪なはずなのに、俺はいつの間にかニンマリと笑っている自分に気づいた。

そして、津山がほんの一瞬だけ言葉を止めたとき、俺はなるべく感情を乗せずに言った。

「んじゃ、今日も、これからバイトだから」

絶句した津山の想いを無言の空氣のなかに感じとりながら、俺は静かに駄目押しの嘘を口にした。そして、なるべく感情を殺して続けた。

「もう、電話はしてこないでよ。ってか、キミからの電話は出ないから」

あ り が と う――。

天井を見たまま、⑥ 声を出さず、俺は口だけを動かした。

そして、一方的に通話を切った。

――森沢明夫『本が紡いだ五つの奇跡』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

問一 〜〜線部 A 「入れ知恵」、B 「泰然自若」、C 「駄目押し」について、これらの言葉の本文中

における意味の説明として最もふさわしいものを、あとのア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「入れ知恵」

ア みずから考えるための手がかりを<sup>あた</sup>与えること。

イ 間違<sup>まちが</sup>った情報をわざと伝えること。

ウ 課題の解決策をそれとなく教えること。

エ 何らかの考えを意図的に吹<sup>ふ</sup>き込<sup>こ</sup>むこと。

オ 知識や教養を深めるための助言をすること。

B 「泰然自若」

ア 行動力があつて<sup>はつらつ</sup>潑刺とした態度。

イ 尊大でいけすかない態度。

ウ 優雅<sup>ゆうが</sup>で洗練された態度。

エ 自分勝手に<sup>ごうまん</sup>傲慢な態度。

オ 悠々<sup>ゆうゆう</sup>としていて動じない態度。

C 「駄目押し」

ア 意味がないことがわかっているのに、同じことを繰<sup>く</sup>り返すこと。

イ 結果が十分あきらかなのに、さらに念を入れること。

ウ 結論はすでに出ているのに、いつまでも不平を言うこと。

エ 勝利が決まっているのに、それだけでは満足しないこと。

オ 無駄<sup>むだ</sup>なことだとわかっているのに、努力をし続けること。

問二 ― 線部①に「俺<sup>おれ</sup>が書いても売れないと思うよ。津山<sup>つやま</sup>さんの実績を落とすだけじゃないかな」

とありますが、この言葉で涼元<sup>すずもと</sup>は津山にどういうことを伝えようとしていますか。二十字以内で説明しなさい。

【下書き欄<sup>らん</sup>】 ― 必要ならば使いなさい。

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

20

問三 ― 線部②に「先生の作品が持つ物語のチカラ」とありますが、津山が考える「物語のチカ

ラ」とはどのようなものですか。二十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】 ― 必要ならば使いなさい。

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

20

問四

☐ X ・ ☐ Y

つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は使えないこととします。

ア 異常

イ 辛辣しんらつ

ウ 愚直ぐちよく

エ 自嘲じちよう

オ 誤解

カ 羞恥しゆうち



問六

——線部④に「ふう、と嘆息して、歩道の脇で足を止めた」とありますが、涼元が「嘆息」したのはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嘘をついてまでこの場を離れたいという思いから一心不乱に歩き続けたので息切れしてしまい、いったん呼吸を整えて落ち着きたいと思ったから。

イ 津山に対する申し訳なさや自己嫌悪の気持ちは消えていないものの、津山の視界から逃れられて、いたたまれない思いからはひとまず解放されたから。

ウ 真面目で熱心な津山のまなざしがいつまでも自分のふがいなさを責めているように感じられてしまい、いったん気持ちを切り替えようと考えたから。

エ 津山に抱いた親近感のせいで、津山のおどおどした態度が他人事とは思えずにいたが、街の冷たい風にあたったことで冷静になり平静を取り戻したから。

オ しつこく勧誘してくる津山の執念深さになかばあきれつつも、席を立つ際の自分の態度の悪さをふと思い返して後悔の念にさいなまれたから。

問七

——線部⑤に「うん、なるほどね……」とありますが、ここでの涼元の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 津山は生き方が不器用で人付き合いが苦手なだけで、実際には東山ひがしやまよりも編集者としての資質があることを見抜き、内心一緒いっしょに仕事をしたいと思い始めている。

イ 個人的な思いで仕事をしているように見える津山は、東山のような優秀な編集者にはなれないだろうとは思うものの、自分に対する津山の強い憧れあこがの気持ちには好感を抱いている。

ウ 津山が提案する作品の構想には、それを書けば確かに誰かだれを救えるだろうという説得力があり、東山が提案するミステリー作品の構想にはなかった力を実感している。

エ 東山には感じられなかった自身の作品に対する津山の熱い話に圧倒あつどうされ、今まで気づかなかつた自己の作品に対する多様な見方や可能性を新たに感じている。

オ 津山は敏腕編集者びんわんであった東山ほどの経験はないが、自分の作品世界を十分に理解していることがわかり、小説を書いてもらいたいという津山の強い思いを感じている。

問八

——線部⑥に「声を出さず、俺は口だけを動かした」とありますが、このときの涼元について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小説家としての本来の姿を思い出させてくれた津山に感謝の気持ちを伝えたかったが、自分の原点ともいえる『空色の闇』をきちんと理解してくれていたことがあまりに嬉しく、かえって素直にありがとうと口にできずにいる。

イ 一人のために小説を書いてほしいという津山の言葉によって『空色の闇』は父一人のために書いたということに思い至り、小説を書き続けるわけにはいけないと思いつつも、小説に対するかつての自分の想いに気づかせてくれた津山に感謝している。

ウ 父親のために書いた『空色の闇』を執筆していたときの自分の気持ちをきちんと理解している津山に敬意を示しつつも、自分の中では小説を書く意欲がどうしてもわからず、津山には届かない形だけの感謝をすることで自分を納得させている。

エ 自分の作品にはたくさんの人を救う力があると熱弁する津山の言葉を聞いて、『空色の闇』は父一人の命すら救えなかったという事実と向き合わせられ、依頼に応じるわけにはいけないと思いつつも、一人でも信じてくれる読者がいたことを嬉しく思っている。

オ 安定した生活のために小説家をやめることを考えていたが、東山よりも深いところまで『空色の闇』を理解している津山との会話の中で、再び創作意欲が芽生えてしまったため、津山にその気持ちを悟られまいとしている。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

京都御苑<sup>ぎょうえん</sup>で月一回行われているキノコの観察会に参加している。友人に誘<sup>さそ</sup>われて気軽に参加して以来、これが今や欠かすことのできない大切な時間になっている。日曜の午前中、希望者が御苑に集まり、長年在野でキノコの研究をされている専門家の方々が先生となり、キノコが生えている場所をぞろぞろと見て回る。説明を聞いて、実物を見て、スマホで写真を撮<sup>と</sup>る。御苑は採取禁止なので見るだけ。参加者は老若男女<sup>らうにょくなんによ</sup>様々で、多いときは五〇人以上にもなっているのではないかと思う。先生は木々の植生に関連付けながら、周りに生えているキノコの種類や働きの説明をしてくれる。それを聞いていると生命が互<sup>たが</sup>いを必要としながら、分かち難<sup>がた</sup>い関係性のもとに成り立っていることがわかり、森のなかを歩く自分も生命の循環<sup>じゅんかん</sup>を成り立たせている要素の一部であることを感じることができる。

多くのキノコは、役目を終えて死に向かう木々や葉に生えて、それを土に返すために日々働いている。そのためキノコを知することは木々の種類だけではなく、その健康状態を知ることでもあり、さらに森全体がどのような関係性で共に生きているのかを体感することにもつながっている。そのようにして先生はキノコを X として自然界の全体像を教えてください。

キノコは地中や地表にネットワークを張り巡<sup>めぐ</sup>らせている菌類<sup>きんるい</sup>の一部分で、胞子<sup>ほうし</sup>を作って拡散していく。ふつくらとした質感、思いがけない色の組み合わせ、群生のエネルギー——自然界は世にも魅力<sup>みりょく</sup>的な造形を生み出す。つい触<sup>さわ</sup>ってみたり、口に入れてみたくなる動物の心理を突<sup>つ</sup>いている。菌類は死んだ木や落ち葉を土に戻<sup>もど</sup>すために、自分を必要としている植物を求めて森を彷徨<sup>さまよ</sup>っている。だから菌類がなかったら森は分解されない倒木<sup>たうぼく</sup>や落ち葉で埋<sup>う</sup>め尽くされてしまうことになる、と先生は強調する。①私<sup>わたし</sup>たちが見ているキノコは『菌類<sup>きんるい</sup>仕事<sup>しごと</sup>中<sup>ちゅう</sup>』の目印<sup>めいしん</sup>のようなものである。

観察会に参加して驚<sup>おどろ</sup>くのは、子供たちが実に多くのキノコを見つけてくることだ。枝や枯葉<sup>かれは</sup>から生えている髪<sup>かみ</sup>の毛のように細いキノコや、土の中に半分埋<sup>ま</sup>まった松笠<sup>まつかさ</sup>に生えているキノコなど、うっかり踏みつけてしまいそうなものまで見逃<sup>みのが</sup>さない。目線<sup>めせん</sup>が低いというのも関係しているかもしれないが、まるで土の表面だけではなく、中で起きていることを身体<sup>からだ</sup>の感覚<sup>くわかく</sup>を使って予測しながらキノコの行き先をたどっているかのようなのだ。むしろ人間が生まれたときには、土と身体<sup>からだ</sup>の間に境界<sup>かいがい</sup>がなかったのではないかとさえ思う。その様子を見てみると、大人になって土から離<sup>はな</sup>れた生活をするにつれて見えなくなったものの多さに愕然<sup>がくぜん</sup>とすると同時に、生まれて間もないころは、今よりもずっと多くのものが見えていたと思うとなんだか楽しい。この世界が多くの見えない生き物によって支えられていると思えば、私たち

人間は孤独を感じる必要はないかもしれない。

観察会に参加するまでキノコについては全くの無知だった。一方、キッチンで日々姿を変えていくヨーグルトや塩麴をつくりながら、舌の先に複雑な感覚を残していくワインを口に含みながら、押し入れの奥で革靴の底にミクロコスモスを作り続ける青カビに驚愕しながら、菌の働きのことをもっと知りたいとも思っていた。見えないけれど確実に変化を及ぼすその働きのなかに、ふと自分の仕事のあり方を説明してくれる何かがあるのではないかと思ったからだ。それ自体は目に見えないけれど、それがないと成り立たないもの。何かと何かの間に入って作用するもの。そんな働きについて考えたいと思っていた。

私は大学で美術史を専攻するなかで、ある作品をきっかけに作家というひとりの人間の生き方や、その人が生きた時代や社会、環境などが同心円状に広がりながら見えてくることに興味を持つようになった。美術作品はいろいろな偶然や必然、多種多様なノイズのもとに生まれてくる。仕方なくその時にある材料で作ったもの。たまたま出会った対象を描いたもの。与えられた環境を生き抜くために必要に迫られて作られたもの。むしろできた当時は作品と認められていなかったものも多い。そのように作品をXとして世界の断片を知することは、その時代と場所を生きた人間と対話をするかのように、作品と自分との距離感もぐっと縮まってくる。だからこそ、いつ・どこで・誰が・どう見るかによって作品の捉えられ方が変化していくし、事実、その価値もひとつではないはずだ。

そのことを別の環境で確かめようとロンドンの大学院では、キュラトリアル・スタディーズを専攻した。キュレーターとは一般的には美術館の学芸員のこと、与えられた環境のなかでどういう文脈と流れて作品を展示するかを吟味することが仕事だ。

ところが、私が入った大学院は街場に学生を放ち、展示場所があらうとなかうと作品を見せる環境と文脈を自分で作り、場所や作家と直接交渉をすることが課題になっていた。時代は二〇〇〇年代、ロンドンでは現代美術に沸いていた。一六人ほどのゼミには世界中から既存のアートのあり方に対して言いたいことがありそうな学生たちが集まり、日々作品の評価について議論をしていた。それは文字通り闘いのA様相を呈していて、私は目の前を行き交う空気弾のような言葉の武器のB往来を眺めながら、彼らがどこまでも正解を求めているようで、<sup>②</sup>人が作るものにたった一つの価値なんて存在するの难道うかと疑問に思っていた。

その後、私は日本に帰って企業に入り、文化事業の担当としてアーティストやデザイナーといった作家とともに作品を作る仕事を一五年にわたり行った。それが展覧会だけではなく、店舗ディスプレイ

や催事さいじになることもあったので、ギャラリーや美術館に勤める美術畑の人から見るとキュレーションとは別ものと思われがちだったが、逆に私にはそれが心地こちよかった。美術とはこうあるべきだという枠組わくぐみにとらわれず、表現にC注力ちゅうりきできたからかもしれない。私にとって、価値をつくる人すべてが作家だった。彼らの問いをこの世界に伝えるために、彼らが作品に落としこんだものに応答し、こんなことを意味しているのではないかという自分の予感とすり合わせながら共に進む。見えないものには正解はない。だからこそ③抽象ちゅうしょうの力を借り、形の魅力みりょくをできるだけ発揮させることが、その問いをより遠くまで届けるために必要なことだった。

実際にその仕事に関わるうちに、作ることにひとつの分野におさまらないもつと大きな働きがあることを実感していった。その感覚を人と共有できない歯痒はがゆさを感じつつ、作家との対話のなかではどこか生物として必要なプロセスを踏んでいるかのような「確からしさ」を感じていた。それは不確定な世界のなかを進む原動力のようなもので、この地球上に生きる生命すべてが行っているはずのことだった。

作品は問いを形にしたもので、展覧会は見せたいものがあるからこそ成り立つ機会である。でも作家とやり取りをしていると、いわゆる展覧会ではない方法で、そこに至るまでの紆余曲折うよきよくせつを伝えたほうがむしろよいのではないかとの思いに至ることもままある。その試行錯誤しこうさくごのなかにこそ作家本人やその周りの人々に活力を与える何かがあるのではないか。展覧会は通過点でしかない。一つの成果が生まれた瞬間しゅんかん、次の課題がちらついてくる。だからこそ常に作り続ける、考え続ける、共振きょうしんし続けるという運動であることが相応ふさわしいような気がする。

ところがそれはとても通じづらい。人は形あるものを求める。④菌類きんるいについてもそうである。人間は〈子孫を残す役割を担になうキノコ〉ばかり追い求めている。しかし菌類の役割はそれだけに留とどまらない。見えないところで菌糸きんしというネットワークを形成し、それを地中から地表から広範囲こうはんいに張り巡らせ、離れたところにいる植物に栄養を届けている。しかも迷路めいろうのように複雑な自然環境のなかで、最適なルートを作って進んでいくという特性があることを示す実験結果も出ているという（『菌類が世界を救うキノコ・カビ・酵母こうぼたちの驚異きょういの能力』マーリン・シエルドレイク、鍛原多恵子訳、河出書房新社、五九―六二頁ページ参照）。それがないと木々は育つことができず、ひいては森を作り上げることもできないのだ。

私が作品制作のプロセスに参加するときにはまず行うのは、作家が世界に向けて投げかけている問いを共有することだ。そこから対話を重ねて、なんらかのメッセージを様々な形で表現していくのだが、そ

れだけでは現実世界に着地しない。私が最も強く自分の「仕事」を感じるのは、自分や作家とは全く関係のない第三者との関連性が現れたときだ。例えば、展覧会の場所やタイミング、文脈の作り方、作品を伝えるためのメディアの種類やデザイン、それを誰に語ってもらうかなど、届け方や出会い方を工夫することで想定していなかった人の心の扉を開くときがある。そのようにして私たちを取り巻く社会や環境、課題に関連したすべての歴史と、伝えるための技術や美意識といった多様な要素を接続していつて、混沌とした暗闇のなかにかすかに見える淡い光の道筋を追いながら、手探りでその思いを形にしていく。出来上がったものを見たとき、ときおり少し裏切られたような気がする。でもそれは、作品が自分の頭のなかで描いていたものを超えた証拠でもあって、⑤それが自立し、さらに次の課題におのずから向かっているということだ。

キノコ観察会に参加していると、「……もどき」というようなキノコの名前をよく耳にする。それは、実際のキノコのあり方が、科学の整理した分類に当てはまらないのでそれと言い切ることができず、やんわりとグループに入れて呼ぶ方法だそう。キノコはやすやすと枠組みを超えていく。先生は観察会で分類できないキノコが見つかるたびに説明の難しさに苦しみながらも「現場では本に書いてあることとは違うことが起こっている」と野外観察の醍醐味を語りながら、目をキラキラさせる。まるで現場にしかない不確かさからエネルギーを得るかのよう。

この世界にあつてどんな枠組みにも入れることができないもの、もしくはそこから逸脱するものには、それを的確に示す言葉も当てはめるカテゴリもないはずだ。私は菌類の動きを思い浮かべながら、同時に分類できない人間の創造をも追っている。そうすることで、この地球に生きる生命としての確からしさを感じようとしている。そして私は今もキノコから多くのことを教わっている。それは逸脱するものを受け入れること、自然の循環のなかに人間の営みを戻すこと、⑥成果だけに止まらない目に見えない創造の蠢きのなかに身を投じることである。

—— 永井佳子「見えないキノコの勤勉な日々」(『図書』第九〇四号所収) による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) \*1 キュラトリアル・スタディーズ……美術館などでおこなわれる展览会などの企画や展示についての学問。キュレーターとは、企画や展示をおこなう人のこと。キュレーションとは、企画や展示をおこなうこと。

問一 線部A「様相」、B「往来」、C「注力」について、熟語の構成として同じものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 文脈
- イ 下山
- ウ 不安
- エ 昼食
- オ 善悪
- カ 絵画

問二 本文中の二か所のXには同じ言葉が入ります。その言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目標
- イ 鏡像
- ウ 主体
- エ 模範もはん
- オ 起点

問三 ――線部①に「私たちが見ているキノコは《菌類<sup>きんるい</sup>仕事中》の目印のようなものである」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地上に顔を出しているキノコは、地中に張り巡らされているネットワークの中で営まれている生命の連鎖の一部にすぎないということ。

イ森の中のキノコは、互<sup>たが</sup>いにネットワークを形成する他の生物に対して、森を分解するという菌類の活動を知らしめる働きを担<sup>にな</sup>っているということ。

ウ 人の目で見ることでできているキノコは、森の生物を分解した結果生み出されたものであり自然界におけるキノコの目に見えない役割を示すものになっているということ。

エ 森に生えるキノコは、地中や地表に広がり木々や葉を分解している菌類の一部分であり、切っても切れない生命のつながりに気づかせるものだという事。

オ商品として扱あつかわれるキノコは、森の中で不要物を分解し生命の循環じゅんかんを成り立たせる菌類が、目に見える形で私たちに届けられるものだということ。

問四 ――線部②に「人が作るものにたった一つの価値なんて存在するのだろうか」と疑問に思っている」とありますが、筆者がこのように思うのはどうしてですか。二十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

[illegible]

問五 —— 線部③に「抽象ちゆうしやうの力を借り、形の魅力みりよくをできるだけ発揮させる」とありますが、それはどうすることですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 作品から感じ取った作家の問いを解釈かいしゃくして、鑑賞者かんしょうしやの心に直接伝えること。
- イ 作家が作品にこめた思いを説明するために、作家の経歴を作品とともに提示すること。
- ウ 作品の価値をより深く伝えるために、展示方法や作品の見せ方くようほうを工夫すること。
- エ 作家の生き方を伝えるために、作家との対話を繰り返すことでより理解を深めること。
- オ 作品の背景となる時代性や同時代の作品を考慮こうりよに入れて、可能な限り作家の意図いどうを探ること。

問六 —— 線部④に「菌類きんるいについてもそうである」とありますが、それはどういうことですか。一行で説明しなさい。

問七

——線部⑤に「それが自立し、さらに次の課題におのずから向かっているということだ」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作品の意味するところが作家の意図やキュレーターが理解したことを超えて、新たな問いが生じているということ。

イ 作品が作家やキュレーターの予想を超えた評価を得ることで、作家が作品制作の意欲を高めているということ。

ウ 作品が作家の力量を超えたものに仕上がることで、それを乗り越えるための修練を作家自身に強いてしまうということ。

エ 作品自体の社会的な評価が作家の存在を超えてしまい、多くの人々がその作品を自由に模倣しはじめるということ。

オ 作品の理解が足りなかったことにキュレーター自身が気づかされ、再度作品と向き合い、作家の問いをより深く掘り下げようとするということ。

問八

八——線部⑥に「成果だけに止まらない目に見えない創造の蠢きのなかに身を投じる」とありますが、それはどういふことですか。筆者の仕事に即して、八十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。



